

タイ国における中薬*〔I〕

木 島 正 夫**

Chinese Drugs in Thailand 〔I〕

by

Masao KONOSHIMA

は じ め に

タイ国内に見られる生薬には主としてタイ古医学に用いられる生薬とタイ国内の華僑あるいは中国系タイ人の間に深く浸透する中国医学に用いられる生薬、いわゆる中薬とが2大主流をなす。しかしタイ国で見られる中国医学は本質的にはわが国における現在の漢方医学と同様ではあるが、実際はかなり異なり、流通している生薬の種類、利用度なども同一ではない。ただ、このような中薬が中国医学とともに広く、かつ数多く流通する状況はタイ国だけにとどまらず、華僑のおよぶ東南アジア各地域をはじめ、その他の地域においてもいずれも同様に見られるところである。

一方、現在のタイ、隣接のラオス、カンボジア、南・北ベトナムなどは広域にわたって現在の中国とは紀元前から関係が深く、中国南部とともに南方系中薬類の産地としても知られているところであり、現在もなお数多くの種類の中薬を生産し、これらがそのままタイ国では中薬として使用されている。それとともに、タイ薬としても使用され、さらに中国をはじめ日本その他の中薬利用圏の各地をはじめ、また医薬品原料生薬としても広く世界各地に供給している。したがってタイ国内に流通する中薬類に絞って考察しても、次の二つの方向から考察しなければならない。

(1) 主として中国、その他アジア各地域に生産され、中薬としての利用を主目的にタイ国へ輸入されてくる中薬類。

(2) タイ国内から生産され、また国外に輸出される中薬類。

* 本研究調査の最終回は昭和46年度文部省科学研究費補助金（海外学術調査）の交付を受けて実施したものであり、「京都大学タイ国に於ける薬用植物ならびに生薬の学術調査」の一部である。

** 京都大学薬学部生薬学教室

これらの中薬の種類は 350～400 種におよぶものと考えられ、およそ主要な中薬を網羅している。わが国の漢方医学に使用されている漢薬（中薬）類と比較するとその主要なものはほとんど含まれ、その種類ははるかに多い。さらにローカル的なものを加えるとその種類はいっそう増加するであろう。

なお、これらの調査は過去数次の予備調査ならびに今回の調査によって得たものであり、香港生薬市場、シンガポール生薬市場における調査、またバンコク、チェンマイ、チャンタブリ薬店を通じての市場流通生薬の調査を併せて記録したものである。

Ⅰ タイ国に輸入されている主要な中薬類

タイ国へ輸入される生薬類は中国本土産のもの、特に中国中部、西北部、東北部産のものが多く、その他中国南部、台湾省、日本、韓国、北朝鮮産のもの、一方では中近東、インド、東南アジア諸地域産のものまである。これらの生薬類は主として香港、シンガポールの市場などを經由してタイ国に輸入されているが、生産地から直接輸入されているものもある。ことに南・北ベトナム、カンボジア、ラオス、ビルマ、マラヤなど隣接諸地域からは陸路、あるいは河川を利用して搬入されているものもある。また中国南部の雲南、広東、広西省産のものも上記諸地域を經由、同様に搬入されているものもあり、これらについては明確に実態を把握することは困難である。なおこれらの生薬中にはさらにバンコク経由で諸外国にまで搬入されているものすらあり、厳密には輸出入のいずれかに属するか判断し難いものもある。これらの中薬の種類は 200 種以上に及ぶものと思料するが、ここには主要な中薬類だけをあげる。

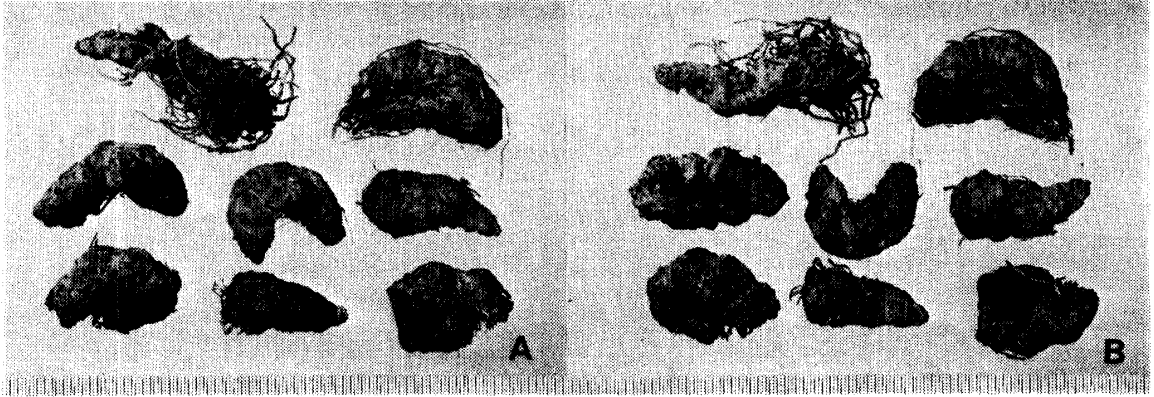
中薬のなかにはタイ古医学に使用される生薬、あるいはタイ古医薬系の各種家庭薬的な売薬に処方される生薬がある。すなわちこれらの生薬はタイ国には生産されない中薬でありながら同時にタイ薬としての性格をもつものであって、このような生薬はタイ族が中国から南下して現在の地に民族の移動とともにその民族薬としてもちきたったものがそのままタイ古医学の薬物として使用されてきたものと推定できる。従来、これらの生薬は、タイ薬物文献にはタイ名だけ挙げられその基原植物は不明のまま無記載となっているものが多く、今回の調査でその数種を明らかにした。これらについては各項で記述する。なお、輸入生薬中、主要な生薬のうち約 10 種は日本で栽培育成して生産する日本産中薬であった。

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
柏子仁	<i>Thuja orientalis</i> Linn. コノテガシワ (Cupressaceae)	Son-paeng	Seed
生薬には種皮をつけたもの（柏子殻）と除いたもの（柏子肉）とがあり、主として香港から輸入している。 <i>Th. orientalis</i> はタイ国でも植栽されているが、野生するものはなく、タイ薬としても使用されていない。			
麻黄	<i>Ephedra sinica</i> Stapf <i>Ephedra distachya</i> Linn. <i>Ephedra equisetina</i> Bunge (Ephedraceae)		Herbous stem
<i>Ephedra</i> 属植物はタイ国には野生しない。生薬はすべて中国北部産のものを香港から輸入している。中薬として使用されるだけである。全形生薬を「麻黄齊」と呼ぶ。			
没食子	<i>Quercus infectoria</i> Oliver <i>Quercus spp.</i> (Parasited <i>Cynips gallae-tinctoriae</i> Oliver) (Fagaceae)	Ben-ja-ka-ni	Insect gall
中央アジア産の生薬。直接輸入しているものと思われる。タイ国薬店では“Ben-ja-ka-ni”と称し、止瀉薬、収れん薬とする。(写真1) なお、タイでは <i>Nothopanax scutellorium</i> Merr. (Araliaceae) を“Ben-ja-ka-ni”と呼ぶが、 ^{4, 5)} 本品をその果実とするのは誤り。			

写真1 “Ben-ja-ka-ni”と呼ぶ没食子 A:全形, B:断面

杜仲	<i>Eucommia ulmoides</i> Oliver (Eucommiaceae)		Bark
中国西北部特産。生薬は全て輸入品で、タイ薬としての利用はない。			
桑白皮	<i>Morus alba</i> Linn. マグワ (Moraceae)	Mon	Root-bark
<i>M. alba</i> はタイ国でも植栽されているが、 ¹⁾ 自生品はなく、生薬は中薬として輸入。中国中南部からの出産が多く、江蘇省産のものは「蘇桑白」と称し良品。タイ薬としての利用はないようである。			

木島：タイ国における中薬〔I〕

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
白 檀	<i>Santalum album</i> Linn. (Santalaceae)		Wood
タイ国には自生しない。生薬はインドなどから輸入するものと思われる。タイ国ではかつて白檀を“chan-thet”と称し、同名の肉豆蔻と混同していたことがある。 ³⁾			
桑 寄 生 槲 寄 生	<i>Viscum album</i> Linn. var. <i>corolatum</i> Ohwi ヤドリギ <i>Taxillus yadoriki</i> Danser (Loranthaceae)		Branch
両者を「桑寄生」と総称することもある。いずれも中国本土産。香港市場から輸入。タイ薬としての使用はない。			
草 河 車 (紫参)	<i>Polygonum bistorta</i> Linn. イブキトラノオ (Polygonaceae)	Lin-hu	Rhizome
中国中部以北に自生する植物で、タイ国には自生しない。 ^{1, 2)} 中国から輸入され、中薬として使用されているものと思われるが、今回の調査ではチェンマイ薬店でタイ薬として取り扱われていることを発見した。なお、タイ薬物文献には本品は記載されていない。 ^{3, 5, 6)} (写真2)			
			
写真2 “Lin-hu”と呼ぶ紫参(草河車) A：上面, B：下面。			
大 黄	<i>Rheum palmatum</i> Linn. <i>Rheum tanguticum</i> Maxim. <i>Rheum officinale</i> Bailon (Polygonaceae)	Kod-ma-taw	Rhizome
大黄は中薬として極めて大切な生薬であるが、一方タイ薬としても健胃、駆風、利尿薬とすることをタイ薬物文献^{3, 4)}に記載している。主として香港から輸入。錦紋大黄系の「雅中吉黄」・「糠心中吉黄」・「雅黄」と呼ばれるものが主である。このほか、<i>Rheum undulatum</i> L., <i>Rh. franzenbachii</i> Münt., <i>Rh. collinianum</i> Bail., <i>Rh. compactum</i> L.などを基原とする土大黄系の「冲台黄」も輸入されている。薬店での調査の結果、中薬としては前者の良品が(写真3：A)、タイ薬としては後者の薬用に耐えない劣品が当てられていることがわかった。(写真3：B)			

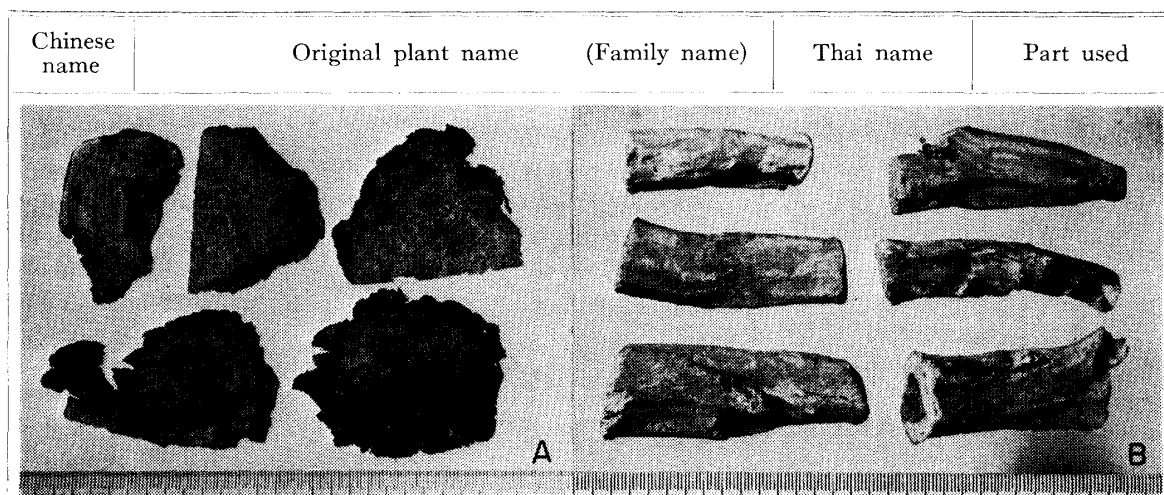
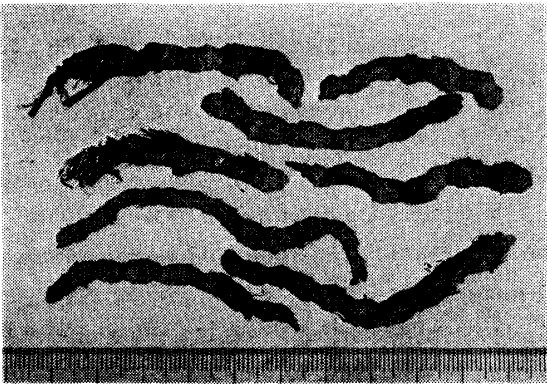


写真3 タイ薬店 (Chiengmai) の “Kod-ma-taw” (B) と中薬店の “大黃” (A)

牛 膝	<i>Achyranthes fauriei</i> Lev. et Vani ヒナタイノコズチ (Amaranthaceae)		Root
	香港から輸入するものには劣品の根頭部 (「頭肥牛七」) もある。		
辛 黄	<i>Magnolia liliflora</i> Desrouss. シモクレン (Magnoliaceae)		Flower bud
	中国産を香港市場から輸入。タイ薬としての使用はない。		
厚 朴	<i>Magnolia officianlis</i> Reuder et Wils (Magnoliaceae)		Bark
	香港市場で「単卷朴筒」, 「温州釵朴練」と呼ぶ品種のものを輸入。タイ薬としての利用はない。		
肉 豆 蔻	<i>Myristica fragrans</i> Houtt. (Myristicaceae)	Chan-thet	Seed
肉豆蔻花		Dok-chan-thet	Aril
	タイ国では中薬としてよりも, 欠くべからざる香辛料として多量使用する。自生なく, 主としてシンガポール, ペナン経由で輸入しているものと思う。またタイ薬としても使用。 ⁵⁾ なお調査に際して入手した肉豆蔻, 肉豆蔻花はいずれも真正品ではなく, 「長形肉豆蔻」系に属する劣品であったが, その基原植物は未だ明らかにしていない。 ¹²⁾		
五 味 子	<i>Schisandra chinensis</i> Bailon チョウセンゴミシ (Schisandraceae)		Fruit
	香港市場から輸入する「北五味子」で, タイ薬には使用しない。		
八角茴香	<i>Illicium verum</i> Hook. f. (Illiciaceae)	Poi-kok	Fruit
	タイ国では中薬としてよりも香辛料として多量消費されている。中国・北ベトナム国境付近に限って産し, タイ国産はない。その輸入経路は明らかでない。 ¹⁴⁾		

木島：タイ国における中薬 〔I〕

Chinese name	Original plant name	(Family name)	Thai name	Part used
桂 皮	<i>Cinnamomum cassia</i> Blume	(Lauraceae)	Thep-tha-la	Bark
西 桂 皮				Flower bud
桂皮類のうち真正桂皮（広南桂皮）はもっぱら中薬として利用されるもので、中国南部、北ベトナムの生産地から直接もたらされるものであろうが、タイ国では香辛料としての用途で輸入量が極めて多く、このほか“Ob-choei-yuen”, “Ob-choei-thet” と呼ばれる桂皮類もあり、おそらく「サイゴン桂皮 (<i>C. obtusifolium</i> Nees var. <i>loureirii</i> Perrot et Eberhardt?), ジャワ桂皮 (<i>C. burmanni</i> Blume) なども輸入されていると思うが、タイ国にも真正桂皮に代用し得るものを今回の調査で採集し、自生しているようであるが、桂皮類の基原植物については今後検討しなければならない多くの問題点が残されている。なおタイ薬として用いるものは別種の <i>C. inerus</i> Blume (Ob-choei) が主で、桂皮としては最劣品である。¹⁴⁾				
升 麻	<i>Cimicifuga foetida</i> Linn.	(Ranunculaceae)		Rhizome
中薬として利用するのみ。中国中北部産で「緑升麻」と呼ぶものである。				
烏 頭 子	<i>Aconitum carmichaeli</i> Debeaux	(Ranunculaceae)		Tuberous root
中薬としては貴重な薬物であり、生薬は「黒付子」、修治した「川烏」、「正培付子」などで、中国西北、北部産のものを香港経由輸入している。タイ国には <i>Aconitum</i> 属植物の自生はなく、¹⁾ タイ薬として利用はない。				
白 附 子	<i>Typhonium giganteum</i> Engler	(Araceae)		Rhizome
	<i>Aconitum koreanum</i> Leveil	(Ranunculaceae)		Tuberous root
前項同様もっぱら中薬として利用するのみ。 <i>Typhonium</i> 属根茎は中国産、 <i>Aconitum</i> 属塊根は朝鮮産で香港経由輸入。別種の <i>Typhonium</i> 属はタイ国に自生し、これをタイ薬として利用する。				
黄 連	<i>Coptis chinensis</i> Franch <i>Coptis teitoides</i> C. Y. Cheng <i>Coptis japonica</i> Makino オウレン	(Ranunculaceae)		Rhizome
もっぱら中薬として利用。香港経由輸入。<i>C. chinensis</i> の根茎は「西蓮王」、「紫蓋連」、<i>C. teitoides</i> は「雲連」（中国雲南省産）、<i>C. japonica</i> は「日連」（日本産）と呼ばれている。調査時にしばしば日本産黄連を薬店で見た。なお最近バンコク市場で「ビルマ黄連」と称するものがあり（写真4）、バンコクから少量、日本に輸出している。本品は「雲連」であり、雲南産か、ビルマ産のものがタイ経由で市場にあらわれるものと考えられる。				

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
	 写真4 バンコク中薬店で入手した “ビルマ黄連”		
淫羊藿	<i>Epimedium sagittatum</i> Baker (Berberidaceae)		Herb
	香港経由輸入。もっぱら中薬として利用する。		
細辛	<i>Asiasarum heterotropoides</i> F. Maekawa var. <i>mandshuricum</i> F. Maekawa (Aristolochiaceae)		Herb with Rhizome
	中国東北部産の「北細辛」を香港市場から輸入。もっぱら中薬としての利用のみ。		
芍薬	<i>Paeonia albiflora</i> Pallas var. <i>trichocarpa</i> Bunge シャクヤク (Paeoniaceae)		Root
	もっぱら中薬として利用。香港市場から輸入。中国産（「中江芍」、「毫芍」、「京芍」）と日本産（「日白芍」）とがあり、タイ国薬店ではしばしば日本産芍薬を見かけた。		
牡丹皮	<i>Paeonia moutan</i> Sims ボタン (Paeoniaceae)		Root bark
	芍薬と同様、中薬として利用。香港市場から輸入、中国産（「京刮丹」、「鳳凰丹」）と日本産（「日丹皮」）とがある。タイ国薬店ではしばしば日本産牡丹皮を見かけた。なお別に中国産の「西康丹」、「西丹皮」と呼ぶ偽品がある。		
竜脳	<i>Dyrobalanops aromatica</i> Gaertn. (Dipterocarpaceae)		“Borneol”
	元来はインドネシア、マレイ産の本植物の材から得られるものであるが、香港市場から輸入しているものは合成品（樟脳を還元）である。「大冰片」、「小冰片」などと呼ばれ、中薬とするほか、薫香料に用いる。		
延胡索	<i>Corydalis bulbosa</i> DC. (Papaveraceae)		Tuber
	中国中北部産生薬を香港市場から輸入。もっぱら中薬として利用。		

木島：タイ国における中薬〔1〕

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
杏 仁	<i>Prunus armeniaca</i> Linn. (Rosaceae)		Seed
桃 仁	<i>Prunus persica</i> Batach. var. <i>daurica</i> Maxim. (Rosaceae)		Seed
	両者とも中国中北部産。もっぱら中薬として利用。香港市場から輸入。タイ薬としての利用なし。かつてタイ国駐日大使館から日本産と称する両生薬の鑑定依頼を受けたがいずれも中国産生薬であった。		
木 瓜	<i>Chaenomeles lagenaria</i> Koidz. <i>Chaenomeles japonica</i> Lindley クサボケ (Rosaceae)		Fruit
	もっぱら中薬として利用。 <i>Ch. lagenaria</i> は中国湖北省産で「資木瓜」、 <i>Ch. japonica</i> は日本産で「日木瓜」（わが国では「和木瓜」）と呼ばれ、香港市場から輸入。果実の形状はことなる。		
金 桜 子	<i>Rosa laevigata</i> Michx (Rosaceae)		Fruit
	「金英子」とも呼び、もっぱら中薬として利用。香港市場から輸入。		
黄 蓍	<i>Astragalus membranaceus</i> Bunge <i>Astragalus mongolicus</i> Bunge (Leguminosae)		Root
	中国東北部産の重要な中薬。「正白芪」は良品。「黒皮芪」は外皮を黒く染めたもので劣品。ときには偽品を黒く染めたものがある。香港市場から輸入。		
甘 草	<i>Glycyrrhiza uralensis</i> Fisch. <i>Glycyrrhiza glabra</i> Linn. (Leguminosae)	Chaem thet	Root and Stolon
	中国東北部産 (<i>G. uralensis</i>) の「鎮西甘草」、中国西北部産 (<i>G. glabra</i>) の「新疆甘草」、中国西北部産を輸入。中薬として利用する一方、タイ薬としても去痰薬とする。 ^{3, 5)} タイ国には産しない。		
枳 殼	<i>Citrus auranti</i> Linn. <i>Citrus wilsonii</i> Tanaka <i>Poncirus trifoliata</i> Raf. カラタチ (Rutaceae)		Unripe fruit
	「枳殼」はいわゆる「未熟橙実」であり、原植物は上記の3種だけとは限らない。産地により「川枳壳」、「江西枳壳」、「緑枳壳」などの市場名があり、大きさもことなる。もっぱら中薬として利用。香港市場から輸入。		
陳 皮	<i>Citrus aurantium</i> Linn. subsp. <i>nobilis</i> Makino (Rutaceae)		Pericarp
	もっぱら中薬として利用。香港市場から輸入。現在は主として日本産（「日陳皮」）を輸入しているようである。		

Chinese name	Original plant name	(Family name)	Thai name	Part used
呉 茱 萸	<i>Evodia officinalis</i> Dode			Fruit
	<i>Evodia rutaecarpa</i> Hook.f. et Thom.	(Rutaceae)		
もっぱら中薬として利用。香港市場から輸入するが、主として日本産 (<i>E. rutaecarpa</i>) (「日呉子」) を輸入する。中国産は <i>E. officinalis</i> の果実である。				
山 椒	<i>Zanthoxylum bungeanum</i> Maxim.	(Rutaceae)		Fruit
	中薬として用いられ、中国産で「紅川椒」と呼ぶ。香港市場から輸入。香辛料としても使用されているようである。タイ国には近縁の <i>Z. budrunga</i> Wall. “Kam-chadl”, “Phrik-hom” があり、香辛料として週末市場などで見られ、タイ薬として強心、駆風薬にしているが、山椒と極めて近似していて両者が混同されているかどうか明らかでない。(写真5)			

写真5 “Kam-chad” としてバンコク薬店で購入したもの(A)とバンコク週末市場で “Kam-chad,” “Phrik-hom” と称し、香辛料として販売されているもの(B) で *Zanthoxylum budrunga* Wall の果実ではないかと思われるもの。

遠 志	<i>Polygala tenuifolia</i> Willd.	(Polygalaceae)		Root
中国北部産。香港市場から輸入。中薬として用いられるのみ。心抜きを「浄志肉」と呼ぶ。				
酸 棗 仁	<i>Zizyphus jujuba</i> Mill.			Fruit
	var. <i>spinosa</i> Hu (= <i>Z. spinosus</i> Hu)	(Rhamnaceae)		
元来、中国北部産の生薬で、中薬として利用するため香港市場から輸入し、「浄棗仁」とも呼ばれているが、最近ベトナム地方産と称する酸棗仁がわが国に輸入されていて、中国北部産のものと同一品か疑問がある。 ¹³⁾				

木島：タイ国における中薬〔I〕

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
栝楼根	<i>Trichosanthes kirilowii</i> Maxim. (Cucurbitaceae)		Root
栝楼皮			Pericarp
栝楼仁			Seed
中国産のものが香港市場から輸入され、中薬として利用。なお、別に中国南部から原植物不明の「大栝楼仁」と称する大形種子を産し、市場でみられる。 ¹³⁾ またタイ国には多数の同属植物が野生し、果実をタイ薬として利用する。			
丁子	<i>Eugenia aromatica</i> Kuntze (= <i>E. coryophyllata</i> Thunb.) (Myrtaceae)	Kan-phlu	Flower bud
主として香辛料として利用するものと考えるが、タイ薬としての利用もあり、インドネシア、ペナン、東アフリカなどから直接あるいはシンガポール、ペナン経由輸入しているものと思われる。タイ国でも保健衛生省薬用植物園で栽培試験が試みられ、精油含量など良質のものが少量生産されるようになり、将来性がある。			
人 参	<i>Panax ginseng</i> C. A. Meyer オタネニンジン	Som-kon	Root
洋 参	<i>Panax quinquefolium</i> Linn. (Araliaceae)		
両者とも主として中薬として使用されている。前者は朝鮮産の「高麗参」、日本産と思われる「紅参」、「白参」、「紅・白参須」(ひげ根)、後者はアメリカ産でいずれも香港市場から輸入。タイ薬としても強壮薬として用いるというが、 ³⁾ 薬物文献 ⁵⁾ には見られない。両者とも同じタイ名で呼ばれるが、バンコク薬店などの店頭に見られるものは多くは「洋参」である。			
田三七	<i>Panax pseudo-ginseng</i> Wall. (Araliaceae)		Root
人参と同様に用いられる中薬。多くは香港市場から輸入する高貴薬。産地・原植物ともに未だ明確ではない。タイ薬には用いない。			
白 芷	<i>Angelica anomala</i> Lall. エゾノヨロイグサ <i>Angelica dahurica</i> Benth. et Hook. ヨロイグサ <i>Angelica dahurica</i> Benth. et Hook. var. <i>paichi</i> Kimura, Hat et Yen (Umbelliferae)	Kod-sor-khao	Root
主に中薬として利用。中国四川省の「川芷」、杭州産の「杭白芷」、さらに日本産の「日白芷」(<i>A. anomala</i>) を香港市場などから輸入。なおタイ名“Kod-sor-khao”と呼ぶものは従来タイ薬物文献 ⁵⁾ では基原不明のままになっていたが今回の調査で中薬「白芷」であることが明らかとなり、チェンマイ薬店で市販されているものは日本産白芷と思われるものであった。(写真6:A)			

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
当 帰	<i>Angelica sinensis</i> Diels <i>Angelica acutiloba</i> Kitagawa トウキ (Umbelliferae)	Kod-chiang	Root
	当帰は中国中北部産の中薬であり、タイ国には産出しない。主として香港市場から輸入する。今回の調査で当帰が“Kod-chiang”のタイ名でタイ薬としても利用されていることを明らかにした。“Kod-chiang”は従来はタイ薬物文献には原植物不明のまま記載されていた。 ⁵⁾ なお、調査隊がチェンマイ薬店で入手した“Kod-chiang”は日本産当帰で「日当帰」の名称で呼ばれている。(写真6:B)		
独 活	<i>Angelica spp.</i> (Umbelliferae)		Root
	独活もまた中国産の中薬であり。タイ国には産出なく、主として香港市場から輸入している。タイ薬としては利用していないようである。		
柴 胡	<i>Bupleurum chinense</i> DC. (Umbelliferae)		Root
	中国北部に産し、タイ国での生産はない。香港市場から輸入している。日本では特に賞用する中薬であるが、南方系では需要は少ない。		
蛇 麻 子	<i>Cnidium monnieri</i> Cusson (Umbelliferae)		Fruit
	中国東北部に産し、香港市場から輸入する。		
茴 香	<i>Foeniculum vulgare</i> Miller (Umbelliferae)	Yi-ra	Fruit
	元来は南ヨーロッパ原産の植物であるが、温帯各地、インドなどで栽培している。タイ国では中薬とするほか、タイ薬として駆風薬、また香味料として用いる。香港またはシンガポール市場から輸入しているようである。なお茴香は“Thian khao-pluak”と呼ぶが、通常“Yi-ra”と呼ぶことが多く、蒔蘿子 (<i>Anetum graveolens</i>)、クミン実 (<i>Cuminum cyminum</i>) も同様に“Yi-ra”と呼び、これらの生薬の混同が見られる。		
防 風	<i>Ledebouriella seseloides</i> Wolff. (Umbelliferae)		Root
	中国北部産の真防風は香港市場から輸入。		
川 芎	<i>Ligusticum wallichii</i> Franch. <i>Cnidium officinale</i> Makino センキュウ (Umbelliferae)	Kod-hua-bua	Rhizome
	中国産の生薬。香港から輸入しているが、中国産ばかりではなく、日本産川芎(「日乃芎」)もあり、また中薬としてばかりではなく、タイ薬としても用いられていることが今回の調査の結果明らかとなり、しかもチェンマイ薬店で入手したものは日本産川芎であった。(写真6:C)		

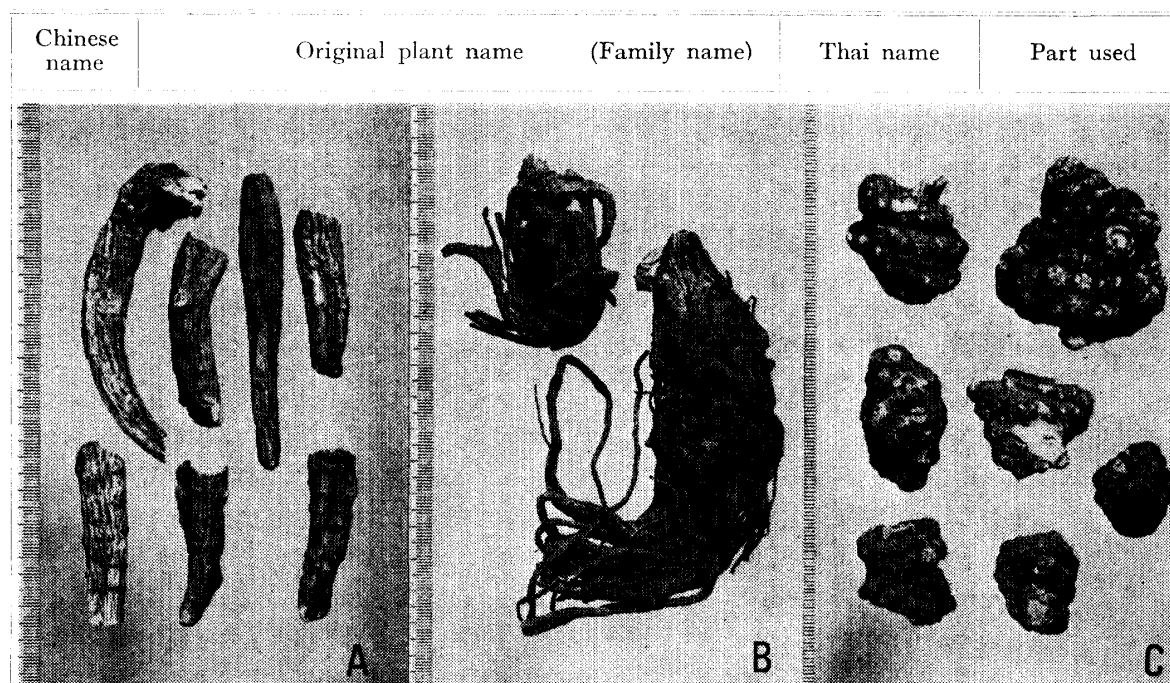
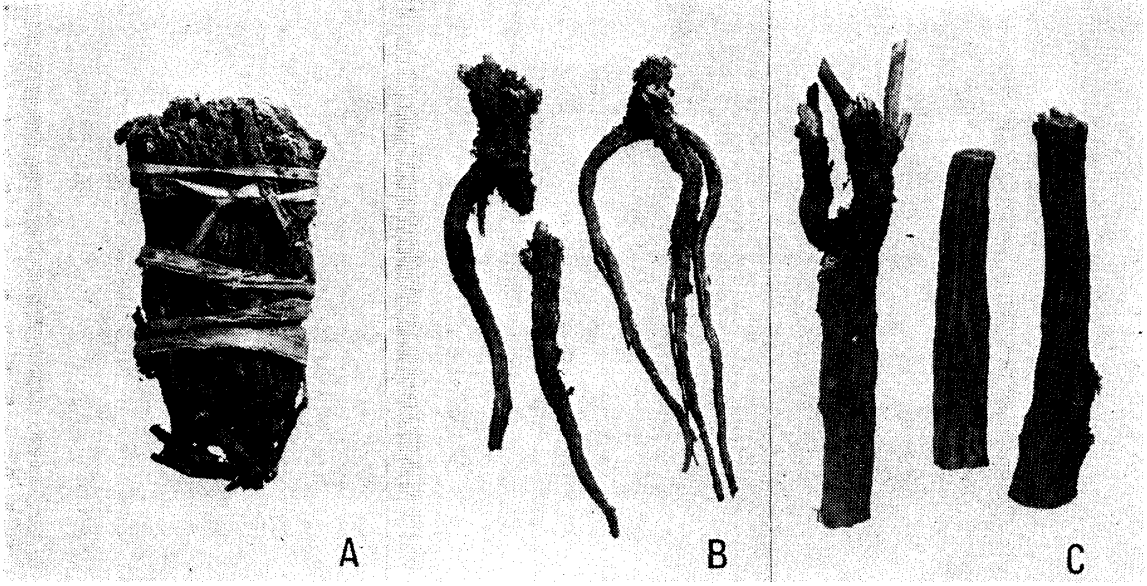


写真6 A: “Kod-sor-khao” (白芷), B: “Kod-chiang (当歸), C: “Kod-hua-bua (川芎)
(3種とも Chiang Mai タイ薬店で購入した生薬)

前 胡	<i>Peucedanum praerptorum</i> Dunn.	(Umbelliferae)		Root
中国産中薬でタイ国からは産出しない。香港市場から輸入。				
連 翹	<i>Forsythia suspense</i> Vahl.	(Oleaceae)		Fruit
白 薇	<i>Cynanchum atratum</i> Bunge	(Asclepiadaceae)		Root
連翹、白薇いずれも前胡と同様に中国産中薬でタイ国に生産はなく、香港から輸入。				
山 梔子	<i>Cardenia jasminoides</i> Ellis. クチナシ	(Rubiaceae)		Fruit
タイ国には他の <i>Gardenia</i> 属植物は自生するが、 <i>G. jasminoides</i> の自生はなく、生薬は香港経由輸入。「山枝子」、「水枝子」の2品種である。同一基原によるものか、明らかでない。				
巴戟天?	<i>Morinda officinalis</i> How?	(Rubiaceae)	Krai-krua	Root
チェンマイ薬店で入手したタイ薬 “Krai-krua” は未確認であるが、中薬「巴戟天」と考えられるものである。なおタイ薬には “Ya-pa” と呼ぶ同属植物数種があり、そのうちには根を薬用とするものもあり、今後の精査を必要とする。“Krai-krua” と称するものはタイ薬物文献には見られない。				

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
ガンビール 阿仙葉	<i>Uncaria gambir</i> Roxb. (Rubiaceae)	Sisiat	Water-extract
ガンビール阿仙葉はスマトラ産のものであり、正六面体立方形（角様）のもと円盤状（銭様）のもの、さらに品質の極めて悪い薄片状のものなどが見られ、薬用よりはむしろほとんどが口嚙料にされているものと思う。			
紫根	<i>Lithospermum erythrorhizon</i> Sieb. et Zucc. ムラサキ (Boraginaceae)	Phak-phaeo-daeng	Root
中国東北部産の中薬。“Phak-phaeo-daeng”はタイ薬物文献 ⁵⁾ によれば同科の <i>Trichodesma indicum</i> R. Br. の根を薬用とすることが記載されているが（写真7：C），われわれが薬店で同名で入手したものは90%，中国産の「紫根」・「北紫根」・「硬紫根」であった（写真7：A, B）。薬店主達の証言によれば、本来は「硬紫根」で <i>Tricodesma</i> の根はその代用語であるという。中薬店の立場から見た場合は上記の通りであるが、タイ古医学あるいは民間薬的立場からは逆であるかもしれない。今後検討する必要がある。なお中国には別に近縁の「軟紫根」があるが、タイ国へは輸出されていないようである。また <i>T. indicum</i> はタイ西北部山岳地帯にわずかに自生するが産量は少なく、含有成分は紫根と同様で含量はやや低く、形状も近似する。			
 A B C			
写真7 “Phak-phaeo-daeng”と呼ぶ中国産紫根（硬紫根）A, Bと <i>Trichodesma indicum</i> R. Br. の根C。			
藿香	<i>Agastache rugosa</i> O. Kuntze. (Labiatae)		Herb
日本では「排草香」、中国広東では「薄荷」とも呼び、また「藿香」には <i>Anisomeles indica</i> O. Kuntz の全草もあるという。香港から輸入するというが、未だ薬店では確認していない。			

木島：タイ国における中薬〔I〕

Chinese name	Original plant name	(Family name)	Thai name	Part used
紫 蘇 葉	<i>Perilla frutescens</i> Britton シソ var. <i>crispa</i> Decne.	(Labiatae)		Leaf
中国産の生薬を輸入。種子（紫蘇子）については明らかでない。				
夏 枯 草	<i>Prunella vulgaris</i> Linn.	(Labiatae)		Flower
中国産の生薬。花穂だけのものを「京枯草」と呼び輸入。				
丹 参	<i>Salvia miltiorrhiza</i> Bunge	(Labiatae)		Root
中国中北東部産の生薬。香港から輸入。「川丹参」と呼ぶものが良品。				
荊 芥	<i>Schizonepeta tenuifolia</i> Briquet	(Labiatae)		Herb
中国産の生薬。全草のほか、花穂だけのもの（「荊芥穂」）もある。				
黄 芩	<i>Scutellaria baicalensis</i> George	(Labiatae)		Root
中国東北部産の中国医学の要薬。香港から輸入。「枝芩」と称する根頭部（２級品）が多い。				
益 母 草	<i>Leonurus sibiricus</i> Linn. メハジキ	(Labiatae)	Kan-cha-thet	Herb
中国東北部からは極めて多産され、繁用される生薬である。水性エキスも「益母膏」と称し同様に繁用する。また種子も「茺蔚子」と称し中薬。 <i>L. sibiricus</i> の分布は広く、タイ国にも自生するが、 ²⁾ タイ薬物分献 ^{3, 5)} には見られない。バンコク薬店で入手しているが恐らく中薬として用いるものであろう。ただタイ国産か輸入品かは明らかではない。タイ国では麻薬の「大麻」（ <i>Cannabis sativa</i> L. var. <i>indica</i> Lamark インドアサ）のタイ名“Kan-cha”と類似し（本品の Kan-cha-thet の thet は“外国の”の意）、この点がわずかに気にかかることである。				
地 骨 皮	<i>Lycium chinense</i> Miller. クコ	(Solanaceae)	Kao-ki-chai	Root
枸 杞 子				Seed
中国北部産の生薬。両生薬とも香港から輸入。 <i>L. chinense</i> はタイ国にも自生しているというが、 ²⁾ タイ薬物文献には記載されていない。 ^{3, 5)} 中薬的利用のみと考えられる。				

Chinese name	Original plant name	(Family name)	Thai name	Part used
密 蒙 花	<i>Buddleia officinalis</i> Maxim.	(Buddlejaceae)		Flower
中国中部産の生薬、香港から輸入。「白蒙花」と称する偽品があるが、タイ国には輸入されていないようである。				
胡 黄 連	<i>Picrorhiza kurroa</i> Royle	(Scrophulariaceae)	Kod-kan-phrew	Rhizome
インド北部に産する生薬。中薬として利用されるほかタイ薬として解熱薬にするという。 ⁵⁾ 恐らくインドから輸入されるものと考える。				
玄 参	<i>Scrophularia ningpoensis</i> Hemsley	(Scrophulariaceae)		Root
地 黄	<i>Rehmania glutinosa</i> Libosch.	(Scrophulariaceae)		Rhizome
両者とも中国南部産の生薬。香港経由で輸入している。地黄は「生地黄」が見られた。				
車 前 子	<i>Plantago asiatica</i> Linn. オオバコ (= <i>P. major</i> Linn. var. <i>asiatica</i> Decne.)		Phak-kad-nam	Seed
車 前 草		(Plantaginaceae)		Herb
中国産の生薬を香港から輸入。タイ国にも自生は多く、その全草の利尿薬、あるいは淋病の薬にする。なおチェンマイ薬店で近縁の <i>P. ovata</i> Farske の種子を入手したが、これについての詳細は不明。				
金 銀 花	<i>Lonicera japonica</i> Thunb. スイカズラ	(Caprifoliaceae)		Flower
香港経由輸入しているが生薬は下級品の「山銀花（あるいは「土銀花」—野生品採集）である。				
甘 松 香	<i>Nardostachys chinensis</i> Batal.	(Valerianaceae)		Rhizome
インド北部、中国四川省などから産する生薬。タイ国へは香港市場から輸入。				
沙 参	<i>Adenophora stricta</i> Miq.	(Campanulaceae)		Root
党 参	<i>Codonopsis pilosula</i> Nannfeld	(Campanulaceae)		Root
桔 梗	<i>Platycodon grandiflorum</i> A. DC. キキョウ	(Campanulaceae)		Root
同系統の中薬。いずれも中国北部産。香港市場から輸入。「沙参」、「桔梗」は朝鮮産のものも含まれるものと考える。				

木島：タイ国における中薬〔I〕

Chinese name	Original plant name	(Family name)	Thai name	Part used
艾 葉	<i>Artemisia argyi</i> Leveille et Vanict	(Compositae)		Leaf
中国北部産の生薬を輸入。				
茵 陳 蒿	<i>Artemisia capillaris</i> Thunb. カワラヨモギ	(Compositae)	Kod-chula-lumpha	Herb
中国から「白綿陳」（春の芽立ちの綿毛を帯びた全草）を輸入。なお “Kod-chula-lumpha” のタイ名でタイ薬としての利用もある。				
紫 菀	<i>Aster tataricus</i> Linn. f. シオン	(Compositae)		Root
中国北部産の生薬。香港市場から輸入。				
蒼 朮	<i>Atractylodes lancea</i> DC. var. <i>chinensis</i> Kitamura		Kod-khe-ma	Rhizome
白 朮	<i>Atractylodes ovata</i> DC. (= <i>A. macrophala</i> Koidz.)	(Compositae)		Rhizome
同朮の中薬。蒼朮は中国東北部産の「津蒼朮」、白朮は中部産の「浙朮」を香港市場から輸入している。両者とも “Kod-khe-ma” と呼んでいるようである。調査に際し入手したものは上記「白朮」であった。（写真8）				
 写真8 “Kod-khe-ma”（白朮） （Chiang Mai タイ薬店 で購入の生薬）				
菊 花	<i>Chrysanthemum morifolium</i> Ramat	(Compositae)		Flower
中国産の生薬。Ch. indicum L. の花も輸入しているものと考えられる。				
木 香	<i>Saussurea lappa</i> Clarke	(Compositae)	Kod-ka-dug	Root
インド北部、カシミール地方産の「真木香」（インド木香）を輸入している。中薬として利用するほかにタイ薬としても使用する。				

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
蒼 耳 子	<i>Xanthium strumarium</i> Linn. オナモミ (Compositae)		Fruit
	恐らくは中国産のものであろう。香港市場経由輸入。		
紅 花	<i>Carthamus tinctorius</i> Linn. ベニバナ (Compositae)	Kham-foy	Flower
	中国西北部, チベット地方産の生薬を輸入し, 中薬以外にタイ薬としての利用があり, 花のほかに種子, 種子油もまたタイ薬として使われている。		
澤 瀉	<i>Alisma plantago-aquatica</i> Linn. var. <i>orientale</i> Samuelsson (Alismataceae)		Rhizome
	中国産中薬。バンコク薬店では福建省産といわれる「建沢」が見られた。タイ薬の利用なし。		
知 母	<i>Anemarrhena asphodeloides</i> Bunge ハナスゲ (Liliaceae)		Rhizome
	主として中国東北部産の生薬。香港から輸入。タイ薬の利用なし。		
天 門 冬	<i>Asparagus cochinchinensis</i> Merr (Liliaceae)		Root
	中国産のものを香港から輸入。天門冬そのもののタイ薬の利用はないが, 同属種縁のものがタイ薬に見られる。		
貝 母	<i>Fritillaria thunbergii</i> Miq. <i>Fritillaria roylei</i> Hook. f. (Liliaceae)		Bulb
	貝母は産地により種々の形態のことなる品種があり, 香港からは「松貝」, 「青貝」, 「芦貝」, 「新疆貝」, 「寶貝」などを輸入している。また日本産貝母(「日珠母」と呼ぶ)も薬店に見られる。		
麦 門 冬	<i>Ophiopogon japonicus</i> Ker-Gawler var. <i>genuinus</i> Maxim. (Liliaceae)		Tuberous root
	中国産とともに日本産(「日麦冬」)のものも輸入している。中薬の利用だけと思われる。		
土 茯 苓	<i>Smilax glabra</i> Roxb. var. <i>concolor</i> Wang et Tang (Liliaceae)		Rhizome
	中薬的利用のため中国産生薬を輸入しているが, タイ国には近縁植物数種が中薬と類似した用途に使用されていて, 最近これらのものが中国産に代わって「土茯苓」と称してわが国にもたらされようとしている。		

木島：タイ国における中薬 〔I〕

Chinese name	Original plant name (Family name)	Thai name	Part used
山 薬	<i>Dioscorea batatas</i> Decne. (Dioscoreaceae)		Root
	中国中部河南，山東省産の生薬を香港から輸入。台湾省からも <i>D. alata</i> などを基原とするものが輸入されるものと考えられる。タイ薬的な利用はない。		
燈 心 草	<i>Juncus decipiens</i> Nakai (Juncaceae)		Herb
	中国北部産の生薬。香港から輸入。中薬的利用だけと考えられる。		
谷 精 草	<i>Eriocaulon buergerianum</i> Koernicke (Eriocaulaceae)		Flower
	中国産のもので香港から輸入されているが，タイ薬的利用はないと思う。		
淡 竹 葉	<i>Lophatherium gracile</i> Brongniart (Gramineae)		Leaf
蘆 根	<i>Phragmites communis</i> Trin (Gramineae)		Rhizome
	中薬としては近縁の生薬であるが，いずれも香港から輸入。		
天 南 星	<i>Arisaema ambiguum</i> Engler (Araceae)		Rhizome
	中国産生薬。香港から輸入。その基原植物は一種とは限らない。タイ薬的利用はない。		
半 夏	<i>Pinellia ternata</i> Breitenbach (Araceae)		Rhizome
	中国医学の要薬。中国産のものを香港から輸入している。タイ薬的利用はないようである。		
香 付 子	<i>Cyperus rotundus</i> Linn. ハマスゲ (Cyperaceae)	Ya-haeo-mu-yai	Rhizome
	香港市場経由輸入するが，一方，本植物はタイ国の各地に多数自生し，その根茎はタイ薬としても使用する。しかし近年ベトナム，カンボジア，タイからは逆に香港経由でわが国などへ輸出されている。		
草 豆 蔻	<i>Alpinia globosa</i> Horaninom (= <i>Languas globosa</i> Burkill, <i>Amomum globosum</i> Lour.) (Zingiberaceae)		Fruit
益 智	<i>Alpinia oxyphylla</i> Miq. (Zingiberaceae)		Fruit
草 果	<i>Amomum medium</i> Lour. (Zingiberaceae)		Fruit

Chinese name	Original plant name	(Family name)	Thai name	Part used
	タノ国産の「白豆蔻」, 「縮砂」とともにカルダモン類生薬であるが, 「草豆蔻」, 「益智」は中国南部海南島, 雷州半島から, また「草果」は中国広西, 雲南, 貴州各省および北ベトナムから産出するというが, タイ国には産出なく, 多少のものが薬店で見られるだけである。輸入経路は明らかでない。タイ薬的利用はないようである。 ¹⁴⁾			
天 麻	<i>Gastrodia elata</i> Blume	(Orchidaceae)		Rhizome
	中国中・西北部産の高貴薬とされる生薬。しかし香港から輸入するものは最高級品ではない。中薬的利用のみと考えられる。			

引用文献

- 1) W.G. Craib, A.F.G. Kerr, E.C. Branett (ed.): "Florae Siamensis Enumeratio" Vol. I. 1925-1931. Vol. II. 1932-1939. Vol. III. 1951-1962. Siam Society, Bangkok.
- 2) Royal Forest Department: "Siamese Plant Names" (Part 1) Royal Forest Department, Bangkok. 1948.
- 3) Mon Sa-ngiam Phong-bun-rot: "Mai-thaet Muang Thai" ("Medicinal Plants in Thailand") Kasaem Bannakit, Bangkok. 1959.
- 4) Phraya Winit Wanandorn: "Thai Plant Names" Royal Forest Department, Bangkok. 1960.
- 5) Phol Phaet-thanasuara: "Pramuan sapphakhun Ya Thai" ("Medicinal Uses of Thai Drugs") Part I. (Ied.) 1964, (II ed.) 1971. Part II. 1967. Part III. 1969. Samakhon Rongrian Phaet Phaen Boran (The Association of the School of Old-style Medicine), Bangkok.
- 6) Technological Research Institute: "An Initial List of Thai Medicinal Plants" Applied Scientific Research Corporation of Thailand, Bangkok. 1966.
- 7) Dansk Botanisk Arkiv: "Studies in the Flora of Thailand," Dansk Botanisk Arkiv, Copenhagen, Denmark. 1961-1963.
- 8) Payorm Wilairat: "Tamrah Kabin Wan Lae Ton Ya Wiset Nahnah Chanit" (The Origins of Important Medicinal Herbs and Trees) Wat Mahathat, Bangkok. 1970.
- 9) Sman Vardhanabhuti (Source: Department of Customs): 1964 Export-Import Figures of Medicinal Plants & Plant Products (Fruits, Herbs, Leaves, Roots, etc.)
- 10) 木島正夫: 東南アジアの生薬にかんする予察報告 —とくにタイ国生薬について— 東南アジア研究, **5**, 182 (1967)
Masao Konoshima: Preliminary survey on the crude drugs in Southeast Asia. Tonan Ajia Kenkyu (The Southeast Asian Studies); **5**, 182 (1967)
- 11) 木島正夫: タイ国生薬の考察 I 東南アジア研究, **6**, 407 (1968)
Masao Konoshima: Natural drug resources in Thailand, I. Tonan Ajia Kenkyu (The Southeast Asian Studies); **6**, 407 (1968)
- 12) 木島正夫: タイ国生薬の考察 II 東南アジア研究, **6**, 936 (1968)
Masao Konoshima: Natural drug resources in Thailand, II. Tonan Ajia Kenkyu (The Southeast Asian Studies); **6**, 639 (1968)
- 13) 木島正夫: タイ国生薬の考察 III 東南アジア研究, **7**, 76 (1969)
Masao Konoshima: Natural drug resources in Thailand, III. Tonan Ajia Kenkyu (The Southeast Asian Studies); **7**, 76 (1969)
- 14) 木山正夫: タイ国生薬の考察 IV 東南アジア研究, **7**, 39 (1969)
Masao Konoshima: Natural drug resources in Thailand, IV. Tonan Ajia Kenkyu (The Southeast Asian Studies); **7**, 391 (1969)
- 15) 木島正夫: タイ国生薬の考察 V 東南アジア研究, **7**, 582 (1970)
Masao Konoshima: Natural drug resources in Thailand, V. Tonan Ajia Kenkyu (The Southeast Asian Studies); **7**, 582 (1970)